

# 浪花百景に基づく良好な水辺景観の継承性に関する研究

現代システム科学域・環境システム学類・環境共生科学課程

恒吉 愛未（下村ゼミ）

**1. 研究目的** 近年、旧淀川の大川では、水辺景観再生への気運が高まっている。しかし、戦後の河川工事による景観悪化や水辺の賑わい性の高まりによる河川設備の商業化により、良好な水辺景観の喪失が危惧される。本研究では、大阪市大川周辺の水辺景観を対象に、情緒的景観特性と景観構成要素から景観特性を探るとともに、『浪花百景』を用いて江戸期の水辺景観イメージの継承性を探ることにより良好な水辺景観を解明することを目的とした。

**2. 研究方法** 調査では、江戸時代末期安政年間頃に描かれた多色刷り浮世絵版画『浪花百景』の大川周辺の 18 景を調査対象景として抽出した。景観構成要素は、視覚の広がりから近・中・遠景に区分し自然物と人工物に分けて抽出した。次いで、地点毎における当時の構図を参考に描かれた地点と同一地点を抽出し、景観写真 18 枚を H. 29 年 10 月～11 月に撮影した。物的景観特性は、各地点に写真内の景観構成要素の画面構成率を近・中・遠景別に算出して捉えた(図 1)。情緒的景観評価に関しては、水辺景観 18 景を刺激写真とし 14 対の情緒的語句を用い、継承性評価に関しては、18 枚の図会と同一地点の現在の景観写真を提示し、構図や構成要素などの継承性の度合いを比較できる 12 個の項目を用いて、本学域学生 46 名を被験者として、5 段階尺度による意識調査を実施して捉えた。解析では 18 景に対する情緒的評価の平均評価点を算出して基礎データを作成した。さらにこれらをデータとして因子分析法を適用した結果を用いて、景観特性を把握した。

**3. 大川周辺の景観特性** 情緒的景観特性の因子分析結果から、因子負荷量を用いて第 1 因子を「快適性」、第 2 因子を「変化性」と意味づけた。次いで、18 景については、因子得点を用いて 2 次元布置図を作成し、さらにクラスター分析によってタイプ I～V の 5 タイプに分類した(図 2)。I：変化性は低いが快適性の高いタイプは、3 景 (①⑥⑱) あり、近・中・遠景が揃った開放感や奥行き感のある景である。また、近景の自然物の多様性により水辺景観としての変化性に差が生じる。潤いのある河川と水辺景観らしい静的空間、動的空間のバランスが良い景 (⑱) が快適性が高いと考えられる。II：快適性が中庸であり変化性がややあるタイプは 7 景 (②③④⑫⑭⑮⑰) あり、近景と中景のみで構成されており、近景の自然物の割合はやや大きくなっている。III：快適性は低いが変化性の高いタイプは 1 景 (⑦) のみで、河川の割合が極端に少なく、建築物や都市の中のみどりが多く見られた都市型の景である。IV：不快で変化性も低いタイプは 6

景観写真	景	景観構成要素		% (空白は除く)
		大分類	小分類	
景観写真 『浪花百景』	近景	自然物	視点場地被植物	53.7
			対岸地被植物	9.4
			対岸中低木	1.3
			対岸高木	9.2
			河川	2.9
		裸地・砂地	1.1	
		その他自然物	0.2	
		小計	77.9	
		人工物	園路	17.1
			橋梁	0.2
	河川舗装材		0.4	
	鉄塔		0.1	
	その他人工物		0.3	
	小計	18.1		
計	96			
中景	人工物	建築物	2.3	
		鉄塔	0	
	小計	2.4		
計	2.4			
遠景	自然物	山	1.6	
		小計	1.6	
	計	1.6		
合計	100			

図 1 『浪花百景』挿図と画面構成率 (⑱馬)

景あり遠景の山並み景の存在が認められても中景の建築物により存在感が薄まっている。この6景は近景における自然物の割合は小さく多様性もない5景(⑤⑥⑨⑪⑬)と、橋梁の割合が7割を越える水辺景観としての変化性がない景(⑧)に分けることができる。V: 極端に不快で変化性も低いタイプは1景(⑩)のみで橋梁が景観構成割合の中で最も高い値を占め、威圧感、密閉感を感じる景である。次いで、二つの因子の評価軸に影響する要因を考察する。「快適性」が高い景は、画面構成率から見ると河川の割合が70%程度と非常に大きく、近景の自然物が多様で、常緑樹・落葉樹が共に存在し季節感を感じられ緑視率の高い景であり、俯瞰景である景が多かった。次に、「変化性」が高い景は、淀川付近の上流の景の方が大阪市都市部の下流の景よりも多く見られた。よって、大川周辺の水辺景観らしきとは自然豊かな静寂性と人間活動が盛んな賑わい性が共存した景だと分かった。

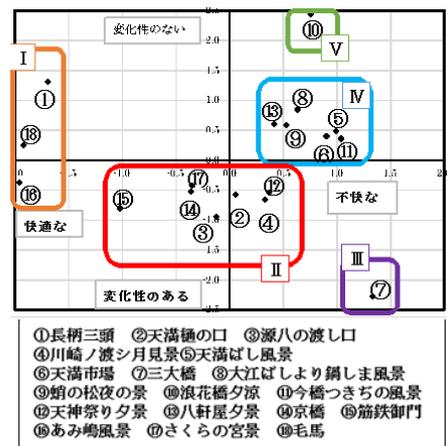


図2 河川景観の情緒的景観特性

**4. 大川周辺の水辺景観の継承性の解明** 継承性の

情緒的景観特性の因子分析結果から、因子負荷量を用いて第1因子を「みどり系」、第2因子を「人工物系」、第3因子を「人間活動系」、第4因子を「自然系」と意味づけた。「みどり系」の継承性に関しては、緑の出現タイプ分けを行った(図3)。継承性が高い景に分類された7景は、景観写真の緑の出現タイプが中心・天蓋型が3景(②③⑱)、中心・床面型が2景(⑤⑮)、中心型が1景(⑯)、床面型が1景(⑱)であった。継承性が高い景は、緑の出現タイプが天蓋型や床面型の景であった。継承性が低いに分類された7景は、中心型が6景(①④⑥⑨⑫⑭)、床面型が1景(⑦)であった。

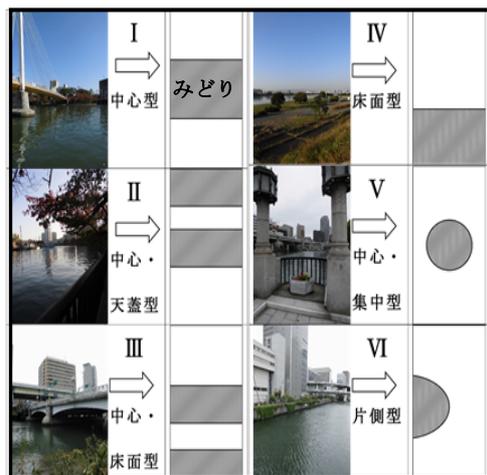


図3 緑の出現タイプの分類方法

図会の天蓋や床下の緑を構成した堤外地の高木群や高水敷の中低木、地被植物が継承されている景も見られたが、現在はほとんどが堤防沿いの高木などの中心型に変容していた。

**5. まとめ**

大川周辺の水辺景観とは潤いのある河川と水辺景観らしい静的空間、動的空間のバランスが良い景で、賑わい性と静寂性の共存した景が継承されていた。また、現在の河川周辺の水辺景観では、継承性が低い景は、緑が堤防沿いの高木のような中心型になっており、継承性が高い景は、緑が堤外地の高木群や高水敷の中低木、地被植物など多様性を保った景であった。今後、大川が都市における良好な水辺景観を形成するためには、中景の建築物の威圧感を軽減し、山並み景が見渡せる眺望性の確保、近景の自然らしさを活かしみどりの量だけでなく質の向上させること、大川の横断面構造を大幅に変化させないこと、水上での賑わい性を持たせることが必要だと考える。